分析レポート

国内経済金融

地域活性化へ積極的な取組み進める八幡信用金庫

渡部　喜智

豊かな地域資源を有する郡上地域

岐阜県・郡上（ぐじょう）地域は、長良川の上流水系を中心とした自然豊かなところである。城下町の郡上八幡（ぐじょうはちまん）は山上に天守閣を有し、街は心懐かしいたたずまいを残す。7～9月に八幡町や白鳥町の町内で場所をかえて三十余夜にわたり行われる盆踊りは、全国的に有名だ。面積の9割を超す森林は良質な杉・ヒノキなど産出するとともに、清流を育んできた。美味しい鮎などが取れる豊かな「水のふるさと」でもある。

郡上地域はテレビや映画のロケ地としても数多く使われ、名古屋市内から高速道路を使えば1時間半で到着する。

しかし、高齢化のもと、地域活性化は急務であった。折りしも、04年に地域の7町村が合併し「郡上市」が誕生する運びとなり、地域が名実ともに一体化し活性化効果をあげることが求められていた。そのようななかで、地域で影響力を持つ関係者のとりまとめ役を果たしたのが、「はちしん」の愛称で呼ばれる八幡信用金庫（以下、同信金）であった。

活性化協議会等で活性化提案

同信金は郡上市のほか、近接する白川村、高山市荘川地区、下呂市金山・馬瀬地区を主要営業エリアとする。2000平方km近い広域をカバーし、9店舗を展開している。この地域全体の経済・金融に通じ関与している存在感は数字が示すものより格段に大きい（図表1）。

同信金の呼びかけにより、市合併に先立ち地域活性化の話し合いが持たれていたが、04年6月に商工会、観光連盟、建設業協会、郡上市、同信金を構成団体に「郡上地域活性化協議会」が発足、その後、森林組合、漁業組合が加盟し現在7団体となっている。基金（1,000万円）は同信金が創立80年記念事業として拠出した。

信金中金の地域・中小企業研究所の支援を得ながら活性化の提言書を作成・提出するとともに、30人程度からなるワーキンググループの「異業種交流会」を組織した。同メンバーは手弁当で、提言の作業や事業推進などにあたってきた。

このような経緯を経て、活性化協議会の取組みは内閣府の「地方の元気再生事業」にも選定された。現在は、地域の植樹活動、観光資源の発掘・同情報のＰＲ・紹介、里山・棚田再生を通じた都市農村交流事業、地元林材を使ったコテージハウス「DECOハウス」供給事業、名物料理育成を狙いとする地元産「きじ」料理の普及事業などが進められている。

また、信用金庫のネットワークを活用した誘客活動を行っている。09年は各地の信金・年金友の会旅行などで4,500人

図表1　八幡信用金庫の概要

（単位：店、人、億円）

項目＼期末	06/3	07/3	08/3	09/3	10/3
店舗数（店）	9	9	9	9	9
期末職員数（人）	111	112	109	109	118
預金残高	910	912	925	940	952
貸出金合計	374	357	354	354	345
うち個人向けローン	132	126	120	116	115

（資料）ディスクロージャー誌より作成

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます

以上を誘客する成果をあげた。

地域活性化の取組みは、融資伸長に現状は必ずしも結び付いていないが、交流人口を増やす試みは成果をあげていると言えよう。なお同信金は、この地域活性化の実践活動により10年6月に第13回信用金庫・社会貢献賞会長賞を受賞した。

顧客コミュニケーションにも注力

営業担当者による顧客訪問は営業活動の柱であることに変わりはない。職員全体の約17%（24人）の人員を配置している。主要な取引先・顧客への営業推進を中心に広域をカバーしている。

この他にも、同信金は広報やイベントを通じた顧客コミュニケーションで前向きな取組み・工夫を行っている。

経営の透明性を高めることを念頭に、95年6月から「はちしん広報」を発行。01年5月からは毎月発行（現在700部）をし、同信金の経営状況やキャンペーン、行事などの情報のほか、地域の出来事なども幅広く取り上げている。ホームページでの掲載や店頭での配布のほか、主要取引先に配布している。記事を写真入りで紹介することで、職員や地域の人々の話題になり、親近感を強める副次的効果も大きいという。また、95年からは地域の企業動向を把握し関係機関にも的確に知ってもらうため、「地元企業の景況」調査を四半期ごとに継続的に行っている（現在、10年9月末で62回）。

同信金は愛称「はちしん」にちなみ、8月8日を基本に平成8年以来、お客様感謝デーを全店で毎年開催している。2,500人規模の来店者があり、定期・定積やクレジット・カードの新規契約客などへの粗品贈呈やくじびき等のほか、お菓子のつかみ取り、かき氷提供、ヨーヨー釣りやアンパンマンの着ぐるみサービスなど多彩な催しを用意し、地域交流の場となっている。夏休み期間中であることもあり、子どもの来店も多く同信金を身近に感じてもらえる良い機会になっている。

預金商品提供でも地域独自色出す

同信金の預金商品は、子育てや高齢者の支援を通じた地域活性化や長期継続取引が発想のベースとなっている。

子ども(22歳以下の扶養家族)を持つ世帯向けに、子どもの数が増えるにつれ、上乗せ金利がアップする定期預金「未来Ⅰ」、定期積金「未来Ⅱ」を発売。子ども1人の場合：0.1%、以下子どもが1人増えるごとに0.05%ずつアップし、最高4人まで0.25%の金利が上乗せされる。

また、年齢優遇定期「ねんねん得々」は、50万円以上1000万円未満預入の3～5年以下の自動継続型の定期預金で預入者の満年齢にしたがって0.003%を乗じた金利が上乗せされる。

このほか、年金受給口座指定の組み合わせなどで金利を上乗せする退職金の受け皿対応にも力を入れている。年金口座指定の地域シェアは3割弱を占める。

以上の推進の結果、定期・定積預金の残高は堅調推移している。

地域とともに生きていくという姿勢のもと、八幡信用金庫の地域活性への主体的な取組みは、地域金融機関として注目される姿の一つと思われる。

“鮎”の形をした八幡町

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます